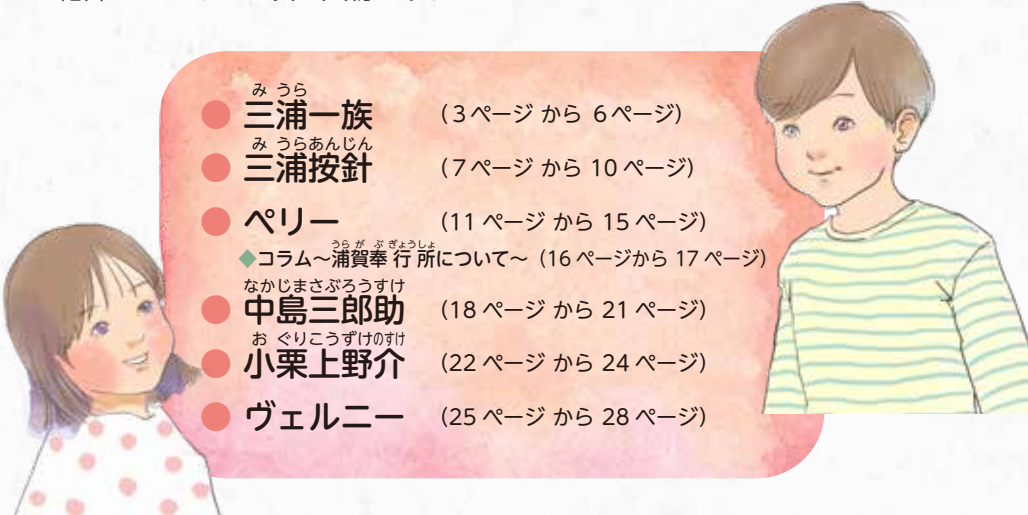


横須賀ゆかりの 歴史上の人物



横須賀の未来^{にな}を担うみなさんが、郷土^{きょうど}の歴史をより身近なものに感じ、関心を持つ機会となるよう、横須賀にゆかりの深い歴史上の人物について、彼ら^{かれ}の業績^{しよくがい}などを紹介^{さっし}する冊子を作製しました。

紹介しているのは次の人物です。

- 
- **三浦一族** (3 ページ から 6 ページ)
みうら
 - **三浦按針** (7 ページ から 10 ページ)
みうらあんじん
 - **ペリー** (11 ページ から 15 ページ)
うら が ぶ ぎょうしや
 - ◆ **コラム～浦賀奉行所について～** (16 ページから 17 ページ)
なかじまざぶろうすけ
 - **中島三郎助** (18 ページ から 21 ページ)
お ぐりこうずけのすけ
 - **小栗上野介** (22 ページ から 24 ページ)
 - **ヴェルニー** (25 ページ から 28 ページ)

この冊子は、小学校6年生から中学生のみなさん向けに編集していますが、大人の方にもご覧いただき、横須賀の歴史をともに語り合うことで、郷土への愛着がさらに深まることを願っています。

よこすか近代遺産ミュージアム ティボディエ邸について



横須賀の歴史をわかりやすく紹介し、横須賀から全国に伝わった習慣や、市内の文化・自然のみどころを紹介した施設がよこすか近代遺産ミュージアム ティボディエ邸です。横須賀製鉄所(造船所)副首長のフランス人技師ティボディエが住んでいた家を、ゆかりの地であるヴェルニー公園内に再現しました。(令和3年5月29日開館)

はじめに

原始・古代の横須賀

豊かな自然と暖かな気候にめぐまれた横須賀は、2万年以上前から人々が生活した跡が残っています。市内には数多くの遺跡が残されていて、原始時代から古代の人々の生活の様子を知ることができます。また、土器の文様などから横須賀周辺だけでなく、広い範囲の地域の人たちとの交流があったことが分かります。

8世紀初めに完成した『古事記』、『日本書紀』では、日本武尊が上総（千葉県）に渡るため、走水を訪れたという神話を伝えています。強い波風の中で船出したところ沈没しそうになり、これを海神の怒りだと信じた日本武尊の妃・弟橘姫命が、身代わりとなって海に身を投じて、その難を救ったといわれています。

また、692年に、「2羽の朱いカラスのひなが『御浦』で捕まり、朝廷に献上された。」ということも、『日本書紀』に記されています。

古代、三浦半島の中心がどこにあったのかは、はっきりして

いませんが、公郷にあった宗元寺（現在の曹源寺）辺りではないかともいわれています。この宗元寺の屋根瓦は、奈良の寺で見つかったものと同じ模様をしていて、このことから、当時の横須賀は、奈良の都と深いつながりがあったことが想像できます。



高坂貝塚出土 縄文時代後期の土器*

はじめに

三浦一族と
横須賀三浦按針と
横須賀ペリーと
横須賀中島三郎助と
横須賀小栗上野介と
横須賀ヴェルニーと
横須賀

み うら 三浦一族と横須賀

いつごろ？

へいあん せんごく
平安時代の終わりのころから戦国時代

横須賀でゆかりの深いところは？

きぬがさ きぬがさじょうあと まんしょうじ
📍 衣笠 (衣笠城跡・満昌寺 など)



11世紀の半ばに東北地方で豪族の争乱があり、朝廷が、これを治めるために差し向けた軍の中に、村岡為通という人物がいました。為通は、ここで活躍した恩賞として、三浦半島の土地をもらい、衣笠を拠点とし、三浦の姓を名乗りました。これが三浦氏の始まりと伝えられています。

それから約100年後に三浦氏を率いていたのは、三浦大介義明(1092年～1180年)でした。やがて鎌倉幕府を開くことになる源頼朝にとって、義明は父親のように尊敬できる人物でした。義明は頼朝の父の源義朝とともに、さまざまな



満昌寺にある木造三浦義明坐像

戦いをして、その力を広げ、
また有力な豪族たちとは、^{けっ}結
^{こん}婚によって^{しんせき}親戚関係となりました。
このような仲間づくり
も義明のすぐれた才能で、そ
れは三浦一族の力を大いにア
ピールすることでもありまし
た。

また、義明は、一族の勢力
^{はん い}範囲の守りを固めることに
も、油断することがありませ
んでした。自分は衣笠周辺
^{ほんきよ ち}を本拠地とし、弟の^{よし ゆき}義行は

^{つく い}津久井、^{ためきよ}為清は^{あし な}芦名、^{よしざね}義実^{ひらつか}は平塚を、^{よしむね}長男の義宗は^{すぎもと}鎌倉の杉本、
^{よしずみ}次男の義澄は大矢部、^{よしひさ}三男の義久は大田和、^{よしはる}四男の義春は^{かも い}鴨居の
^{た た}多々良、^{よしすえ}五男の義季は^{なが い}長井、^{しげゆき}六男の重行は^{はやま}葉山の^{もり と}森戸、そして十
^{よしつら}男の義連は^{さ はら}佐原を領地として、守りを固めていました。

もう一つ三浦一族の特徴を挙げると、この時代の武士は、馬を
乗りこなせることが重要でしたが、三浦一族には、これに船が加
わります。^{よし い}吉井には、^{すいぐん}水軍の基地と考えられる^{ぬ た じょう}怒田城が置かれ、
^{ぐんせん}軍船も備えられていたのでしょうか、この城の近くには、「^{しろ}舟倉」
^{ふなぐら}という地名も残されています。



平安時代の三浦一族の拠点

はじめに

三浦一族と
横須賀

三浦按針と
横須賀

ペリーと
横須賀

中島三郎助と
横須賀

小栗上野介と
横須賀

ヴェルニーと
横須賀

さらに、船の便利さや重要性をよく分かっていたと思われ、鎌倉時代には、いくつかの港が開かれていたといわれています。土地がせまいため、作物の採れる量も限られていた三浦半島で、これだけ大きな軍団を持つことができた背景には、船によってもたらされた、たくさんの物資があったのではないかと考えられています。



衣笠城跡

1180年、頼朝が、源氏の世の中をつくろうと立ち上がった時にも、三浦氏は、一族をあげて応援しましたが、最初の戦いで敗れ、衣笠城を守っていた義明は戦死してしまいます。しかし、義明の息子や孫たちは、船で房総半島へ逃がれ、そこで頼朝と落ち合います。頼朝は再度軍を立て直し、1カ月後に鎌倉に入りましたが、三浦一族は、頼朝が鎌倉幕府を開くことにも力を貸しました。

鎌倉幕府が成立した後も、三浦一族の活躍は続きました。しかし、1247年、執権の北条氏と対立し、政治的な争いに巻き込まれて、三浦氏は滅びました。このとき、三浦一族の中で、義連の流れをくむ佐原一族の一部は北条方についたので、このあと三浦氏を引き継ぐことになりました。

北条方についた三浦氏は、三浦半島の南部などに領地を持ち、また、南北朝の戦乱の時代には足利氏に味方をして、室町時代にも三浦半島

での支配を続けていきました。

16世紀のはじめ、小田原^{おだわら きよてん}を拠点とした北条氏（鎌倉時代の北条氏と区別するために小田原の北条氏は後北条氏^{ごほうじょうし}と呼ばれています。）に攻められて、三浦氏は敗れ、ついに姿を消すことになります。

その後、三浦半島も後北条氏の支配となり、城が築かれた浦賀^{うらが}は、後北条氏の水軍の基地として、港が整備されていきました。

後北条氏は、天下統一をめざす豊臣勢^{とよとみ}に破れ、そして江戸^{えど}に徳川家康が来ることになりました。

現在、衣笠^{いたた}では、三浦一族を称え、鎧姿^{よろい}の武者たちが衣笠のまちをパレードし、その雄姿^{ゆうし}を再現する「三浦一党出陣武者行列^み」が2年に1度行われています。



三浦一党出陣武者行列

三浦一族ゆかりのお寺

衣笠や大矢部の周辺には、三浦一族ゆかりのお寺があります。

義明^{よしあき}を弔うため、1194年に源頼朝が建てたと伝えられる満昌寺^{まんしょうじ}、三浦氏の初代為通・二代為継^{ためつぐ}・三代義継^{よしつぐ}のものと伝えられるお墓がある清雲寺^{せいうんじ}、そして、義明の十男義連^{よしかん}のものと伝えられるお墓がある満願寺^{まんがんじ}などがあります。



満昌寺

はじめに

三浦一族と
横須賀

三浦按針と
横須賀

ペリーと
横須賀

中島三郎助と
横須賀

小栗上野介と
横須賀

ヴェルニーと
横須賀

み うら あんじん 三浦按針と横須賀

いつごろ？

あ づち もも やま
安土桃山時代の終わりのころから
え ど
江戸時代の初めのころ

どこの国の人？

イギリス（オランダ船に乗って日本へやって来た）

横須賀でゆかりの深いところは？

へ み
逸見（三浦安針墓※・浄土寺 など）

うら が
浦賀

※現在では三浦按針として広く知られていますが、
三浦安針墓には「安」の文字が使用されています。



三浦按針*

ウィリアム・アダムズ（1564年～1620年）はイギリス人ですが、日本での名前を「三浦按針」といい、「青い目の侍」として広く知られています。アダムズはもともと優秀な航海士で、1600年にリーフデ号というオランダの船に乗って、うすき おおいた ひょうちやく
臼杵（大分県）に漂着しました。

日本にやって来たアダムズは、おおさかじょう
大坂城に
とくがわ いえ やす よ
いた徳川家康に呼び出され、さまざまな質問を受けました。そこでアダムズは、イギリスのことや船がたどってきた経路を話しました。また、貿易をすることで、イギリスは日本と友好的な関係を結ぼうと考

えていると伝えました。家康はアダムズの優秀さを知り、アダムズの乗っていたリーフデ号を堺（大阪府）の港に回すように命令しました。しかし、この時までにリーフデ号の積み荷のほとんどは奪われていて、アダムズは着替えもないような状態でした。これを哀れんだ家康は、積み荷が戻ってくるように手配し、アダムズにお金も与えました。その後、家康はリーフデ号を浦賀に回すように命じましたが、浦賀に着いた時には壊れてしまっていたということです。

家康がリーフデ号を浦賀へ回させたのは、積んでいた大砲を会津（福島県）の上杉景勝との戦いで使うためでした。この戦いには、リーフデ号の乗組員も参加させたといわれています。この時アダムズは、家康に砲術の腕前を認められ、家康に仕えることになったといわれていますが、もっと大きな理由は、世界の動きや、科学の進歩の状況など、アダムズの知識が、家康にとって大いに役立つものだったからでした。

家康の外交顧問として、外国とのかかわりなどに関する相談役となったアダムズに、家康は逸見村を領地として与え、旗本という徳川氏の家来にしました。こうして「青い目の侍」となったアダムズは、「三浦按針」という名前になりました。姓の「三浦」は、領地の逸見村が三浦にあったことから、名前の「按針」は水先案内人の意



浄土寺にある念持仏
アダムズが持ち歩いたといわれる

はじめに

三浦一族と
横須賀三浦按針と
横須賀ペリーと
横須賀中島三郎助と
横須賀小栗上野介と
横須賀ヴェルニーと
横須賀

味で、アダムズの仕事であった航海士にちなんで付けられたものです。なお、領地であった逸見の浄土寺には、^{ねんじぶつ}念持仏をはじめ、アダムズゆかりのものが残されています。

三浦按針となったアダムズは、浦賀や^{ながさき}長崎の^{ひらど}平戸で、スペイン船やイギリス船との貿易で大きな^{やくわり}役割を果たしました。例えば、ある時アダムズは、家康に西洋式の大きな船の建造を命じられ、浦賀の船大工たちと協力して船を完成させます。その船は、ドン・ロドリゴという^{そうとく}スペイン領の総督が乗っていた船が壊れてしまった時に、代替りの船として使われました。

この出来事がきっかけとなって、日本とスペイン領メキシコとの貿易が本格的に始まり、スペインからの初めての使節として、セバスチャン・ビスカイノという人が、浦賀にやって来ることにもなりました。こうしたアダムズの活躍は、^{こきょう}故郷のイギリスにも伝わり、アダムズは、日本とイギリスの関係を左右する重要な人物となりました。

アダムズは1620年にその^{しょうがい}生涯を終え、その業績を^{たた}称えて^{あんじんづか}按針塚がお墓として建てられました。ところがその後、^{えどばくふ}江戸幕府は「^{さこく}鎖国」といって、外国と付き合うことを長い間制限してしまい、イギリス人は日本に来ることができなくなってしまいました。



三浦安針墓

やがてアメリカのペリーがやって来たら、幕府は鎖国をやめ、イギリス人が日本に再びやって来るようになります。そして^{かれ}彼らが、「日

本に最初にやって来たイギリス人」を^{さが}探すようになり、アダムズが注目されるようになったのです。

明治時代になり、^{よこはま}横浜で貿易の仕事をしていたジェームス・ウォルターズというイギリス人が、日本の実業家やイギリスの領事とともに^あお金を出し合い、荒れ果てていた^{かいしゅう}按針塚を改修しました。その後



県立塚山公園

1902(明治35)年に日本とイギリスの間に^{どうめい}同盟が結ばれると、アダムズの業績にさらに注目が集まり、今度は、^{かながわ}神奈川県知事やイギリス大使までもが運動に参加して寄付金を集め、按針塚はさらに改修されました。

このように日本とイギリスの関係が注目されるたびに、アダムズの業績は思い起こされたのです。やがてその業績を称えて、「^{あん}按針祭」が^{じんさい}開催されるようになりました。「按針祭」は、今では横須賀市の四大国際式典^{かいさい}*の一つになっています。

現在、按針塚は、桜の名所として知られる^{つかやま}県立塚山公園にあり、見晴らしのよい山の上に静かに建っています。

※横須賀市の四大国際式典

横須賀市の発展に^{はってん}関係の深い人物や歴史上の出来事を称え、市民のみなさんに横須賀市への理解を深めてもらうため、関係する人たちを招いて国際的な式典を開催しています。三浦^{かんおうかい}按針祭観桜会、^{かんりんまる}咸臨丸フェスティバル式典、^{すいしー}水師提督^{とく}ペリー上陸記念式典、^{あぐりさい}ヴェルニー・小栗祭式典の4つの式典があります。

はじめに

三浦一族と
横須賀

三浦按針と
横須賀

ペリーと
横須賀

中島三郎助と
横須賀

小栗上野介と
横須賀

ヴェルニーと
横須賀

ペリーと横須賀

いつごろ？

江戸時代の終わりのころ

どこの国の人？

アメリカ

横須賀でゆかりの深いところは？

📍 ^{く り は ま}久里浜 (ペリー上陸記念碑・ペリー記念館)

📍 ^{う ら が}浦賀



ペリー*

マシュー・カルブレイス・ペリー
(1794年～1858年)は、1853
年7月に日本にやって来て、久里浜に
上陸し、アメリカ大統領の親書を幕府
に受け取らせることに成功しました。
これは、日本が国際舞台へとデビュー
する第一歩であり、日本でもアメリカ
でも、ペリーはこの出来事のアメリカ
側の主役としてよく知られています。

浦賀に到着する1年半前の1852年
1月、日本に向けて出発するように命

令されたペリー
は、準備に取り
掛^かかり、手に入
られる限りの日
本に関する資料
を読んだり、日
本に行ったことが
ある人に会い、



ハイネが描いたペリー上陸図*

情報を手に入れたりしました。日本に関する勉強を終え、準備が整ったペリーは、1852年11月にアメリカを出発しました。ペリーは、アフリカの南端を回り、地球をおよそ半周して那覇（沖縄県）へ到着し、そこからさらに進んで浦賀へとやって来たのでした。

浦賀でペリーと最初に話し合ったのが、この出来事の日本側の主役、浦賀奉行所^{ふぎやうしょ}の役人たちでした。当時、彼らは、江戸の海を外国船から守っていました。守るといっても、彼らは、なるべく外国船に危害^{きがい}を加えないように、幕府から命令されていたので、やって来た外国船には何とか説得して帰ってもらっていました。そのため、彼らは、外国船との話し合いに慣れていました。

例えば、ペリーは奉行所で一番身分の高い奉行としか交渉^{こうしやう}しないことにしていて、始めは浦賀奉行所の役人たちを船に寄せませんでした。彼らは「副奉行」という肩書き^{かたが}をとっさに名乗り、船に乗せてもらい、ペリー側と交渉する糸口をつかみました。このような判断は、外国人との交渉を何度も行っていなければならないことであ

はじめに

三浦一族と
横須賀三浦按針と
横須賀ペリーと
横須賀中島三郎助と
横須賀小栗上野介と
横須賀ヴェルニーと
横須賀



日本側が描いたペリー一行^{いっこう}*

り、それほど外国人との話し合いに慣れていたということになります。

その浦賀奉行所の役人たちの中でも、香山^{かやま}栄左衛門^{えいざえもん}は特に有能でした。香山はペリー側から信頼^{しんらい}され、話し合いのほとんどが香山を通して行

われました。日本にとってもアメリカにとっても、このペリー来航という大きな出来事は、香山の活躍^{かつやく}があったから無事に終わったといってもよいでしょう。

そして、ペリーが特に日本に大きな影響^{えいぎょう}を与えたのはその行動でした。日本との交渉は、江戸に近い場所で、強い態度をもって臨む^{のぞ}ことが必要であると考えていたため、ペリーは浦賀に来航して、すぐに近海の測量を始めます。この測量は毎日のように行われ、ついには日本の役人たちが止めるのも聞かず、江戸の羽田沖^{はねだ おき}まで行われてしまいました。当時は、観音崎^{かんのんざき}と富津^{ふつ}（千葉県）を結んだ線から奥^{おく}は、何としても外国船を入れさせないことになっていましたが、ペリーはそれを無視^むしたのです。そればかりか、猿島^{さるしま}を「ペリー島」とするなど、自分たちで地名も付けていました。

翌年^{よくねん}（1854年）、ペリーは再び来航し、日米和親条約^{にちべい わしん}が結ばれますが、これにより、下田^{しもだ}（静岡県）と箱館^{しすおか}（現在の函館^{はこだて} 北海道^{はこだて ほっかいどう}）が

開港され、鎖国は終わりました。

その後、幕府は、日本が国際社会で対等な付き合いをしていくためには、自分の国を守る軍艦が必要であると考えようになりました。実は軍艦が必要であることは、浦賀奉行所の役人たちが、その少し前から幕府に訴えていましたが、鎖国を守ってきた幕府は軍艦を造ることを認めませんでした。ところが、ペリーの行動で幕府は考え方を換え、軍艦を導入するようになります。ペリーは、アメリカでも海軍の発展に努力した人でしたが、日本の海軍を発展させる一つのきっかけを作った人でもあったのです。



ピアズリー

ペリーが日本にやって来てから、およそ 50 年がたった 1900(明治 33)年 10 月、ペリーの部下として黒船に乗っていたピアズリーが、昔をなつかしんで久里浜を訪れました。その時の久里浜はただの漁村で、ペリーがやって来たことを思わせるものが何もないことに、彼はショックを受けました。そこで、ピアズリーはその年の 11 月に日本で行われた式典で、その思いを話しました。「米友協会」*の会長の金子堅太郎はこの話を聞き、ペリーが上陸したことを記念する碑を

※米友協会

アメリカに留学し日本に帰国した後、経済や政治の世界で活躍する人たちが交際する場として1898(明治31)年に設立されました。その2年後に金子堅太郎が会長に就任しています。

はじめに

三浦一族と
横須賀

三浦按針と
横須賀

ペリーと
横須賀

中島三郎助と
横須賀

小栗上野介と
横須賀

ヴェルニーと
横須賀

建てることを計画します。金子の情熱により、ピアズリーが話をしてから8カ月後の1901(明治34)年には記念碑が完成しました。除幕式には当時の内閣総理大臣やアメリカ公使、アメリカ艦隊の司令官などが集まりました。



除幕式の様子 1901(明治34)年

久里浜に記念碑が建った翌年から、久里浜村の行事として「黒船まつり」が行われるようになり、1947(昭和22)年からは本格的に行われるようになりました。現在は「ペリー祭」として行われていますが、そこで行われる上陸記念式典は、横須賀市の四大国際式典の一つとなっています。



現在のペリー上陸記念碑

ペリー公園

ペリーが上陸した久里浜の海岸に面した公園です。園内には「ペリー上陸記念碑」のほか、ペリーがやって来た時の貴重な資料を集めた「ペリー記念館」があります。2019年には、展示物や床面をリニューアルしました。



ペリー記念館

うらが ぶぎょうしょ

浦賀奉行所の開設と「浦賀奉行所開設300周年」

み うらあんじん とくがわいえやす
三浦按針や徳川家康
が活躍した江戸時代初
めからおよそ 100 年が
経つと、江戸の街には
多くの人々が住むよう
になりました。そのため、
多くの食料や日用品など
の荷物も江戸に運ぶ必要
があり、当時「天下の台所」と言わ

れていた大阪から船で運ぶだけでは足りず、関東や東北地方からも、多くの荷物を船で江戸へ運んでいました。

これまで江戸に出入りする船の荷物の検査は、下田（静岡県）で行われていましたが、大阪からの船の検査が中心で、江戸に出入りする全ての船を検査できませんでした。

そのため下田奉行の堀利喬は、幕府の軍船を操る向井氏にも頼み、江戸に出入りする全ての船を検査できる港を調べました。その結果、最も良い港が浦賀であることがわかり、1720 年に浦賀奉行所が下田から移転し

新たに開設されました。下田奉行であった堀は、そのまま初代の浦賀奉行になりました。

2020 年、浦賀奉行所は開設されてから 300 周年の節目を迎えます。浦賀にペリーが来航した時に日本側の主役として交渉した浦賀奉行所の人々の活躍を、この節目をきっかけに、多くの人達に知ってもらえることを願っています。



江戸時代の浦賀を描いた浮世絵*



浦賀奉行所の建物(左上)と
船の検査を行う番所(右下) (国立公文書館)

はじめに

三浦一族と
横須賀

三浦按針と
横須賀

ペリーと
横須賀

中島三郎助と
横須賀

小栗上野介と
横須賀

ヴェルニーと
横須賀

ペリーより前に来ていた外国船と浦賀奉行所の役人たち



1818年のイギリス船来航時の絵図（国立公文書館）

とうきょうわん
東京湾に來航した外国船は、ペリーの船が初めてではありません。浦賀奉行所開設からおおよそ100年が経った1818年に、浦賀に立ち寄ったイギリス船が最初の來航で、その後ペリー來航まで6回

も浦賀に外国船が來航しています。これらの外国船とトラブルにならないよう交渉をしていたのが、浦賀奉行所の役人たちでした。

特に、1846年のアメリカ人のビッドルが率いる軍艦2隻の來航は、今まで来ていた外国船とは違って大きな大砲を備えており、その目的が日本との貿易を求めていることに、奉行所の役人たちはとても驚きました。このビッドルの求めを、幕府が断るのをわかっていた奉行所の役人たちは、ビッドルへ返事をした後、すぐ戦争が始まり死ぬこともあると覚悟していたほどでした。

幕府からの断りの返事を実際にビッドルへ伝えた人物は、18ページから紹介する中島三郎助の父であった中島清司でした。奉行所の与力（役人）であった清司は、ビッドルに断りの返事を伝えましたが、ビッドルは何もせずにそのまま浦賀をあとにしました。

この出来事後、清司は海軍力を強化するために、幕府が軍艦を造らなければ、外国船から江戸や日本を守ることができないことを、意見書にして幕府へ提出しました。



ビッドル艦隊の絵図*